

小・中・高校生の部

入賞

広島県知事賞

センチ メンタル

枯れた造花

君の手紙

愛情なんて廃れて

寂しそうにしている

親に貰った愛情

返せなかつた感動

ストレス性蕁麻疹

ごめんなさい、言いたい

1^{エル}になつたS字フック

真つ直ぐ進んでく

私の人生表してゐるのか

熊野町立熊野東中学校三年 田中 未来

挑戦する君が羨ましい

親指と人差し指
仲良くくつついて
薬指と小指なんて
寄り添つて楽しそう

大丈夫だよ
中指が一番、堂々としてて
かっこいい

小さい頃から全力だつた
もうガソリンも入つてないのに
必死に進む小さい車
結局これからどうすればいいんだろう
私を傷つけたアイツは

私の友達と楽しそうでさ
私を傷つけた私は
眺めてるだけなんて

いつの間にかみんなさ
上の方にいて
それを見あげるんだけどね
いつの間にか上なんて見なくなつた
見れなくなつた

「夜に爪を切るな」
なんておばあちゃんが言つた
「百回しゃつくりしたら死んじやうよ」
なんて幼稚園の子供

味のする朝食

ハッピー エンドな結末
待つてるけど、待つてるけどさ。
勿忘草と一緒に

百回目のしゃつくり

現 代 詩 部 門

広島県議会議長賞

風呂

県立広島中学校三年 三宅美葡萄

脱衣所で服を脱いでいるとき

湯船には人間くらいのカエルがいて

緑色の肌をつやつやさせて

真つ赤なワインを舐めている

私が戸に手をかけると

あわててグラスごと飲み干して

欠けた石鹼になつてしまふ

だから私はワインの銘柄を知らない

シャンプーを流しているとき

背中の鏡ではきつと

幽霊が大勢詰めかけて

変顔大会をやつている

他の家でやつてくれ、と思う

湯あたりした日なんかには
天井の板がパコッと外れて

鉤繩が落ちてくる

いつも天井を睨んでいるせいか
まだ忍者に会ったことはないか

頭の先までほくほくして

風呂を出たら

もちろん、腰に手をあてて
冷えた麦茶を流し込む

ふはー

広島県教育委員会賞

帰省

熊野町立熊野東中学校三年 土肥 朋花

からからり ぬけがらの声
これはくまぜみ あれはにいにいぜみ
庭に植わった松の木に すがりついた衣服

からからり 玄関扉を開ける
帰つてきたのか 出かけたのか
外の畠に 草抜く背中

からからり 机の麦茶が笑う音
かがやく玉を 身につけた
彼らの足元 水たまり

からからり 扇風機が止まる
あなたじや この夏の暑さに
勝てることはないだろう

からからり ぬけがらの声

さけた背中と 半透明の体が
夏に残した 土の香り

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

父を目標としたゴルフ

英数学館中学校一年 山中 呂莞

父がやつていたから

ぼくも自然と手にしたクラブ

まだ十二歳

握る手は少しきこちない

半年もたたないけれど

芝生のにおいや

青い空に吸い込まれるように飛んでいく白い球に

ぼくはすっかり夢中になつた

父と並んで立つティーグラウンド

「右を向きすぎんな」

「リズムを大事にしろ」

そんな声が風に混ざつて届く

ぼくはうなずいて

大人用のおさがりのクラブを振りぬく

重いクラブが体を引つぱる

だけど、当たつたときの響きは

胸の奥に じーんと残る

フェアウェイを歩くときは
ただの運動じゃない
父と同じ歩幅で進むと
なぜか少し背が伸びた気がする
ゴルフ場はどこも違つていて
山の上の涼しい風
海に近い場所のしょっぱい潮の匂い
森の中の鳥の声
その全部が旅の景色みたいで
ラウンドは ちょっとした旅行だ
スコアはまだ九十台
父にはかなわない
でも一打一打に悔しさと嬉しさがあつて
カップにボールが吸い込まれるたび
声をあげて笑つてしまう
負けたくない気持ちと
同じ時間をわかちあえる喜びと
二つの思ひが
フェアウェイに影のように並んでいる
いつか父を越える日がくるのだろうか
そのときは
今日より少し広い背中で
父の横に立つていて
父の横に立つていて

風に流れる雲を見上げながら思う
芝の上を歩く音は軽やかで
この道はまだまだ続していく

現 代 詩 部 門

広島市長賞

雨模様

県立広島皆実高等学校三年 流出明日嘉

雨が降る

しとしと パラパラ ザンザン

風が吹く

ぴいぴう ビュービュー ザーザー

窓も鳴る

ぎしぎし ガタガタ ゴトゴト

晴耕雨読というけれど うるさくて読書に集中できやしない

頭の痛みもひどくなつてきた

そうだ！ こんな時こそ散歩に出かけよう

お気に入りのかつばに 奎に 長靴

帰つてきた時は ずぶ濡れだろうから

大きなタオルを2枚 玄関に

お風呂のタイマーをセットしよう

体を温めるためのココアも用意して

準備万端 出かけよう

雨が降る

ただ それだけで日常が変わる
ぐるりと変わる

木の枝が揺れる ざわざわ揺れる 右に左に行つたり来たり
花が項を垂れる いつもは ただ上を向いて太陽を見ているのに
雨水の重さに耐えられず項を垂れる

道には水たまりが出来る

ぱちやんぱちやん ぴちゃんぴちゃん

雨が音を立てて 水面に波紋を作る 風ぐ一瞬さえ与えずには
木の下の水たまりは おとなしく木に守られている

私は風いだ水面を 壊す

足を振り下ろす

飛沫が飛び散り 舞う 舞う

私が壊した この世界に変化を起こした

水の這つた道を 踏み締めながら 歩く 歩く 歩く

雨の日の散歩は なんて楽しいんだろう

壊れた日常に踊る心 無意識に歌う唇 舞う足

気持ちは バレリーナ

歌手 アイドル 何にだつてなれる

傘で閉ざされた私だけの空間で

誰にも邪魔されない私の時間 秘密の時間

雨の世界をたっぷり堪能した後は
温かいお風呂とココアでまつたり余韻を楽しもう

外は雨 今も日常を壊し続けている
うるさい音も ひどい頭の痛みも変わらない
でも もう気にならない
だって 私も雨と一緒に
世界をほんの少し破壊したから

現 代 詩 部 門

広島市議会議長賞

クラゲ

県立広島中学校二年 末広 沙弥

それは
深く澄んだ水の中
溶け込むように
ただひつそりと
揺れている

掴むことも

掬い上げることもできない

柔らかく冷たい
流れるような体

そのほとんどは水
光を透かすだけの存在

けれど

ほんの5%だけ
水でも光でもない

クラゲだけのものがある

それは
水中を優美に漂うことへの
静かな自負かもしけない

その5%こそが
クラゲを
クラゲたらしめて いる

心の大樹

県立広島皆実高等学校二年 石川直太朗

本がたくさんある場所は

いつもほんの少し木の香りがする

この本棚にある本がどれだけのパルプでできているか知らないけど

本棚を見る時いつも僕には紙でできた大樹が見える

僕は本を手にとる度にその途方もなく大きい大樹の一部を削ぐ

パラパラ パラパラ 音が鳴るたびに

僕の中に小さな小さな木が育つてていることに気づく

目の前の大樹は僕の手じゃ到底削り切れないとぐらいあって

しかもぐんぐん ぐんぐん伸びていくのを見ると

僕は嬉しくなる

大樹をよくみると

それは一本の樹などではなく

いろんな木が絡み合っていることに気づく

その一本一本のなんと大きいことか

僕は自分の木を見てその小ささに少し焦る

いっぱいいっぱい紙を与えて

ほんの少しづつ自分なりの形に育ててきた

その木に乗つて

まだ見ぬ高みに挑むとき

僕はもつともつと もつともつと嬉しくなる

辺りを見ると周りには

木の育て手たちがたくさんいる

きつと僕たちを遠くから見てみると

森のようにみえるんだろう

でもいまその森はどんどん小さくなっている

僕の夢はその森が世界を覆い

誰もが心にある木に気づくこと

その木が栄養を求める 育ち

また新しい森がつくられる

そんな未来を 本をめくるたびに思い描いている

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞
せみの命

英数学館中学校一年 孫

福宏

夏になると

虫の音がうるさくなる

その代表的な虫はせみだ

数十匹ものせみが鳴くといまいまい

朝から夕暮れにまで鳴いてしまうから

自分はいらついちやう

夕暮れになると

せみの声が聞こえなくなる

もうみんな帰ったのかな

自分は夜の静かさで不安になつた

寝た翌日も

毎日毎日

鳴いている

そして思う

せみなんて存在しなければいいのに

ある日ひさびさに

外へ出てみた

外の道を歩いていると
何びきものせみの亡骸が
落ちていた
それでもまだ
せみは鳴いている
不思議だ

自分の命はみじかいのに
なぜ鳴いてばかりいるの
毎年夏に
せみは鳴きにやつてくる
けれど、数カ月で
どこかへ行つちやう
せみがいない春と冬は
外がさみしい
せみがいる夏と秋は
外がさわがしい
それはまるで
人間にたとえれば
昼と夕暮れは元気で
夜や朝は元気がない
というパターンと
だから思つた
一緒だ

せみはただ鳴いているだけではなく
みんなの気持ちを悲しく気まずい
空氣をおくらないように
さわがしくしていたことを
夏休みだからこそ
みんなでもりあがつて楽しもうということを

現 代 詩 部 門

笑顔の魔法

県立広島皆実高等学校二年 坂本 あゆ

僕たちは大学二年になつた
一年の時と比べ 課題の量は突然 倍以上になり
睡眠時間はどんどんと削られていく

だから毎日 僕を含めみんなが

疲れきっているのは当たり前のことだと思う

だけど 隣の席に座る彼女は

僕たちなんかより 相当しんどい状況だ
なぜなら とんでもない量の課題に加え

彼女は重い病を抱えている

近々入院することが決まつたらしい

明るく振る舞つて いるけれど いつも顔色は良くなくて…

きつと入院しなければならなくなつたことが
相当 心の負担になつて いるんだと想像して いる

君はよく僕にこう言う

「ねえ！笑顔になれる魔法をかけて！」

本当に魔法をかけてほしいのではなく

ただ みんなのよう 元気で 一日中 学校にいたい

未来への希望を持ちたいという想いの比喩なのだと思う

でも 僕は素直なキャラじゃない

「うーん どうしたらいいんだろうね」

「僕には何のとりえもないからね」

君をからかいながら のらりくらりと僕は答えをはぐらかす

君も本気で言つて いるわけじゃないんだろう

僕が答えなくとも真剣に追求して来ないから

僕は「君の願いなんかたいしたことじやない」と思つて いる

そんな風に見せている

でも本当は：

「君に魔法をかけてあげたい」と

真剣に願つて いるんだ

君にはずっと笑顔でいてほしいから

やりたいことが何だつてできるようになつてほしいから

僕は「君のための魔法使い」になりたい

だから 見つからないようにこつそり

君にかける最高の魔法を準備して

白衣をまとって 僕は日々学び続けて

まだまだ完成には時間がかかりそ

君のために編み出そうとしているいくつもの

僕の魔法

いつか君にかけることができる日まで

どうか生きることをあきらめないでいてほしい

現 代 詩 部 門

旅

廿日市市立七尾中学校一年 井上 亜子

春のキャベツを取り出すると

小さな虫がいた

シャキシャキ美味しい

お布団で

のんびり旅を

していたのかも

いただきます

美味しく育ったミニトマト

切つていねいに種を

取り出して

きれいに洗つて種にして

植えたら命がつながつた

美味しく育った野菜

立派でつやつやカラフルで

料理をして食べると

たちまち笑顔で幸せに
命の旅はつながっていく

セミのゆめ

たいへん　たいへん　たいへんだあ

うーんと　うーんと　てをのばし
なんども　なんども　てをのばし
がつこうの　さくらの　きのセミを
なんども　とろうと　したんだよ

なんども　なんども　にげられて
なんども　おしつこ　かけられた

おしつこ　かけられすぎるとね
セミのまほうに　かかるんだ

つぎのひのあさ　おきたらね
ぼくのからだは　へんしんだ
セミのからだに　へんしんだ
あした　セミに　なるのかな

海田町立海田小学校一年 石原 亮平

そんなん
ゆめのなか
でを

いみつて
たんだよ

キリギリス

ぼくの家にはキリギリスがいる
名前はギリス

ギリスはみどり色の体

ギリスはギリリリリリーとなく

ギリスはやさいを食べる

ギリスは元気にジャンプする

ギリス、もうすこしいつしょにいようね

現 代 詩 部 門

お兄ちゃん

おーい お兄ちゃん

つて叫んでも お兄ちゃんのいなない部屋
お兄ちゃんに会えなくなつて 一週間
病院でお腹空いてないかな?
会いたいな

最初はお兄ちゃんがいなくて
おかし半分こにしなくていいから
うれしいつて思つた

お兄ちゃん 元気?

私のこと忘れてない?
足痛いのなおつた?

全然返事のないお兄ちゃん

会いたいよ

さみしいよ

早く帰つてきてよ

海田町立海田小学校四年 北島 彩羽

今度はたっぷりおかしあげるから

お兄ちゃんの部屋で

毎日寝るとね

お兄ちゃんのにおいがするよ